

会報 峠 とうげ

河井継之助記念館  
友の会会報  
第18号  
2015.10

編集・発行  
河井継之助記念館  
新潟県長岡市長町1丁目1675-1  
〒940-0053  
Tel.0258-30-1525  
Fax.0258-30-1526  
頒布価：50円（送料別）

### 継之助の本質を想う

友の会会員 太刀川 喜三

我々の知って居る継之助の印象は幼少の頃より積極的に自己を表現し、即実行に移す人、形式に捕われず実を採れば良いと云う考えを持ち、例えば馬術を習う時にも実技を最も重視し、馬は乗って走ることが出来れば事足るとして、師は己づから自身で選び、その師と選んだ人物からは納得出来る迄、教えを乞うという徹底した実力主義者でしかも深慮、即実行型の指導者との概念を持つている。

特に戊辰戦争の中に出て来る継之助を見ると奥羽越列藩同盟に加わり総督として三国峠の戦

同数の約五千人づゝであったが七月上旬には東軍は増員なく西軍は三万人となり最終的に八月末には五万人と十倍となった。これだけ西軍が増兵させられ、それに對して東軍が善戦したのは、色々な政略があつたがその二面に継之

人生百年を生きても、この世は旅のようなもの、欲を去って、さっぱりすれば万事即刻、心が安らぐ（故直井時雄氏意訳）  
文久二年神無月は継之助三十六才の十月に詠んだ句である。  
この詩に詠まれていた様に継之助自身は百年の長い人生を生き抜く術を謳っている。それは、欲を持たず、万事 ゆっくり安心して過す事を云っているが、これは彼の歩んだ生涯とは真逆の路であつた。彼の過した時勢が彼を必要として、彼の理想としていた考えを許さなかつた物と思う。



これを考えると継之助が江戸でなく現代に生きて居たならと想うと非常に興味をそゝられる。

助の厚い人望と積極的な統率力が多分に寄与した事も一因に挙げられたのではないかと思う。  
こんな強烈な印象を我々に与える継之助であるが、全く別の人生観を持つている様にも思われる一面を覗かせて普段着のまゝの継之助を見る事が出来る。

微章は継之助を慕う者の証。そしてそれを見るたびに安らぎを感じて下さい。自然の過酷さ、情勢などで胸を痛めたとしても、決して自分を見失ふことなく生きた、その継之助の姿勢をより一層身近に感じていただきたい。そう願っています。（布川）



喜龍窟秋義（継之助）書の七言一句の詩

それがここに掲載した蒼龍窟秋義 継之助の七言一句の詩である。

本刀川喜三（たちかわきぞう）プロフィール  
昭和10年（1935年）長岡市生まれ。太刀川株式会社就職後、昭和43年常務、ヒトシーフ（株）工場長を兼任。退社後平成13年長岡市民センター設立に伴い入社、のちにアオーレに移籍。79歳で退職。趣味は絵画。写真。郷土史研究。写稿。

### 峠抄 とうげしやう ⑰

味わうまもなく過ぎていくのを見送る。いつのまにかそれが季節となつてしまつたように思ひます。そんな中、友の会記念事業で只見より植林された二本の松は、その細いたたずまいからは想像できないほどたくましさを感じさせます。長岡の地は夏暑く、冬は深雪。その過酷な環境の中でへこたれることはありません。松はゆっくりと地に根を付け、天を仰いでいます。友の会も二本の松同様、全国に支持を集め現在に至ります。文字通り河井継之助が、彼の生き方、思想が日本に根付いてきたのでしよう。そしてこの度、念願の河井継之助記念館友の会徽章を制作することが叶いました。会員の皆様のお手元にはもう届いておられることと存じます。

# 『峠』の越後長岡を歩く 15 番外編

連載

司馬遼太郎の『峠』に描かれている「越後長岡」の風景を現在に訪ねるシリーズ。今回は番外編として信州小諸エリアを歩いてみました。

●『峠』中巻 新潮文庫 488 ページより

先年、小諸騒動というのがあった。お家騒動である。お家騒動の多くのばあいがそこであるように、この場合も世継<sup>よせつぐ</sup>についてのものであった。家老の一部が現藩主の康民<sup>やまみ</sup>を廃してその弟の信之助を立てようとし、徒党を組み、それに対して反対派が立ち上がり、たがいに争い、藩政は大いに混乱した。

長岡から近くて遠い信濃国。島崎藤村の詩に「小諸なる古城のほとり」と歌われた長野県の小諸が今回の舞台です。長岡の親戚藩である小諸藩牧野家では、幕末に世継ぎをめぐる内紛がありました。世にいう小諸騒動です。慶応三年（一八六七）四月に御奉行格になった河井継之助が、騒動の調停のため小諸城に登城したことで知られています。

そもそも長岡藩には、四つの支藩がありました。比較的石高の大きい二つ、常陸笠間藩（八万石）・丹後田辺藩（三万五千石）は、徳川氏より別に取り立てられました。一方石高の少ない残りの

二つ、与板藩から移封された信州小諸藩（二万五千石）・「米百俵」で有名な越後三根山藩（二万二千石）は、長岡藩の初代・牧野忠成の次男と三男が分地されたものです。小諸藩と三根山藩は宗家である長岡藩に見習うことが多く、政治向きについても、色々伺いを立てる関係にありました。

文久三年（一八六三）六月、九代小諸藩主牧野康哉が亡くなり

ます。長男の康民は跡継ぎとして育てられていましたが、次男の信之助を担ぐ派があり、対立しました。結局十代目藩主は、長男の康民が継ぎますが、対立の根は残ります。次男の信之助派が、康民の夫人をも取り込み巻き返しに動きまわります。このことを受け、康民がささいな罪を理由に、信之助擁立派を厳罰に処したことから、捨て置きがたしと宗主の牧野忠恭に訴え出ました。そして河井継之助が解決に乗り出すこととなります。

しなの鉄道小諸駅を下車する



大手門



懷古園



小諸城と石垣

牧野家の家紋 三つ柏



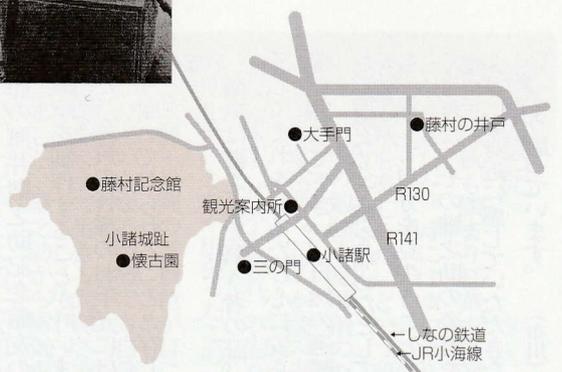
牧野公遺徳碑

と、線路の対岸にあるのが小諸城です。城跡は「懷古園」とよばれています。中世の時代からあった城を、仙石秀久が慶長年間（二五九六～一六二五）に改築した穴城で、すり鉢状の地形に建つのが特長です。現在では当時築かれた天守台などに石垣と大手門、三の門が現存しています。石垣は「野面石積」と呼ばれる石垣の組み方の一種で、自然石に近い石を積み上げる方法が特徴的です。



小諸駅

島崎藤村の井戸



懷古園から線路をはさんで対岸、少し歩いたところにあるのが大手門です。二階入母屋構造の楼門で、石垣と門が一体化しています。二階は居館形式を取っていて、上がるのが出来、料亭として使用されていた時期もあります。当時は瓦葺の門が珍しかったため「瓦門」と呼ばれたりしました。

大手門からさらに歩いたところに島崎藤村使用の井戸などもあります。

江戸時代だけでなく、中世や文豪の風情の残る小諸の城下町は、実は長岡とつながりの深い場所であり、また河井継之助が手腕を振った舞台でもあったのです。（高柳）

※参考文献「河井継之助の生涯」安藤秀男著

## 河井継之助の資料 ①

作家秋山香乃さんが新潟日報誌上に、河井継之助を主人公にした「龍が哭く」を連載している。小説のスタイルで描写をしているのでとても解りやすいと評判である。人物評伝でもなく活劇とすれば、人物像をどうにしても表現できる旨味がある。最近市原隼人さんが衛星劇場で「最後のサムライ」を演じたが、封建の義に生きた主人公を新ミュージカルふうに演出して面白かった。

さて話を戻すが、作家の秋山香乃さんと出会い、雑談をすると「河井継之助という人物は、知られているわりあいには謎が多い」とおっしゃった。河井継之助記念館を預っている私も同感である。調べれば調べるほどわからなくなることがある。それが人物伝だといってしまうそれまでだが、基本的な資料がないことが多い。

たとえば、河井継之助が江戸遊学をして、古賀茶溪の門人となった際「李忠定公集」を寝食を忘れて筆写した話があるが、その自筆写本が現在、みつからないというのも不思議な話である。「李忠定公集」は内容がわかるから良いのではないかと思うが、展示しようと

企画する当館にとつては自筆の写本がないことは致命傷みたいなものである。

長岡は戊辰戦争の際、焼かれたから自筆写本は残っていないだろうというのが、大方の温情的な見方だが、実は昭和九年八月二十八日付の「北越新報」には現存し、市内某家(某家には旅日記「塵壺」があった)に残っていることが記載されている。(旅日記は当館に展示中)

「李忠定公集(木箱入十一冊)蒼龍窟筆写佐久間象山先生題字森源三箱書」というふうに記載している。ついでにいえば「王陽明全集拔翠一冊、蒼龍窟筆写三島中洲先生跋」もあり、そのまま続けて公表すると難があるので抜き書きすると

「蘇文二冊、言志録一冊、続近世叢語抄一冊、日本楽府一冊、明紀鈔(明朝記事本末抜書)五冊、歴代名臣奏議三冊、岳忠武王集一冊、柴野彦助書写一冊」などと自筆写本が羅列しているのである。

ほかにも継之助の自筆か否かわからないが「由旧録二冊、海国兵談六冊、孫子国字解七冊、秋山先生学文意味書一冊、蝦夷国談二冊、三河後風土記四十六冊などの

書写本があった。書幅も二幅あり、別に良寛書幅が一本あった。これには但書があつて「蒼龍窟の愛翫せる幅(軸は蒼龍窟印章)」という書き込みまである。

個人的雑感をいえば、最近、継之助が筆写した『日本外史』を他で見聞したことがあるが、その蔵書目録には「太平記八箇傳」という継之助の筆写本もあるらしく、継之助の少年時代を形成する面白いものだった。

宗徧流の宗匠がみたらビックリするような父代右衛門の「茶道便家抄図解三冊」など茶道関係石灯籠の図などもある。最後に茶道器具湯沸一、抹茶碗一、其他小籠入れ」とあり「蒼龍窟親父秋紀京都に護送せられし時、駕籠中に使用せしもの」という但書きまである。駕籠のなかで茶をたしなんだなど不可解であるし護送という言葉がひっかかる。

風聞によれば、十代藩主牧野忠雅が大坂城代となつて大塩平八郎の乱の後始末をしたといわれているが、父は大坂詰となつた際、粗相があつて、京の所司代で吟味されたのであろうか。資料を調べていると全くわからなくなることが多い。(稲川)

## 遠方からの客人

●インタビュー⑩ 高崎から176kmを5泊6日で歩きました



山口太輔さん 平成27年9月5日

高崎から長岡までの176kmを8人のチームで5泊6日の行程を歩きました。1日目は悪天候。その日の終盤 中山峠では濃霧で視界が10m程しかない中、薄暗い峠の長い上りを車に追い越されながら歩きました。翌日の猿ヶ京では温泉旅館に宿泊、三国峠に備えました。3日目は朝6時半頃出発、三国峠のピークには13時頃につきました。群馬県内最後の宿場 永井宿からの自然歩道は上りもきつ

関東からお越しの大学生グループ、その中の山口太輔さんから寄稿していただきました。

### ●どんな活動をしていますか

私の所属するサークルは、今年の夏企画の一つとして、継之助が江戸への旅で通つたであろう「三国街道」の歩行を計画しました。大まかには登山サークルですが、山だけでなく「街道歩き」も行なっています。これは全国津々浦々に張り巡らされた「街道」を

車や自転車ではなく自分の足で歩くのです。テント等の荷物が入った大きなザックを背負い、1日20〜40kmを歩きます。宿にも泊まりますが、ネットカフェ泊、公園、道の駅で野宿もあります。一見つらそうに見えますが、仲間と話していると結構簡単に歩けてしまいます。実際辛いですが(笑)

### ●今回の旅は

この日は長岡市内にある私の祖父母宅で一泊。翌日、河井継之助記念館にお邪魔しました。長岡の有名人として継之助の名前は知っていましたが経歴は知らず、今回の訪問で勉強になりました。改めて継之助も通つた三国街道を歩いたことに思いを寄せました。三国街道は景色もよく、米も酒もおいしい道でした。今回記念館で学んだことも振り返りつつ再度歩いて違つた三国街道を楽しんでみたいと思ひます。(山口太輔/写真その他 黒田)

# 河井継之助はどういう人物？

連載

## その⑮ 望月忠之丞のこと

河井継之助の股肱の一人に望月忠之丞という人物がいる事は知られていたが、その詳細が分からなかった。ところが、最近、東京に住む望月順一さんがたびたび、当館（河井継之助記念館）を訪問してくださり、祖先の望月忠之丞について注意を払うようになった。昔は調べ物には貪欲で、解らなければファイトを燃やして調べたものだが、最近では病勢もあって腰が引ききみだ。それでも耳を澄ますと過去から「俺を発見してくれ」と悲痛の訴えを聴くことがある。

望月忠之丞もそういった人物で、禄高はたった三十石。その男が戊辰戦争では銃卒隊長となり、総督河井継之助の側近となった。今泉鐸次郎の『河井継之助傳』では「河井継之助が佐久間象山を嫌いだった」とか「藩主の菩提所の栄涼寺の仏閣を継之助の命令で、奪還戦の際に焼いた」ことが書かれている。

長岡城下図には望月家の屋敷は見当たらず江戸定府の藩士かと思われていた。ところが、望月

家は戊辰戦争後、望月順一さんの話では栃尾に住んだという。栃尾は長岡藩藩領栃尾組のことで、その中心地に栃尾町（旧栃尾市）があった。栃尾は養蚕の町・織物の町であった。太古の昔、守門嶽の麓で天然繭がとれた伝説もある。そこに望月家はいたというのである。



『越後風俗志』の第五輯に「寛文のはじめ、牧野忠成は絹の改良と振興のために、信州佐久郡望月郷から、滝沢五兵衛を招いて、栃尾郷へ派し、郷民に製糸上の技術を伝習させた」とある。『越後風俗志』の第五輯の発行は、明治二十六年四月十日のことであるからそう伝説も間違つてはいないと思う。

その滝沢という技術者が藩士に取りたてられた際、出身地の望月を姓としたのではないかと

思われる。望月家は代々、栃尾町にあって製織の技術者・指導者または管理者となつて、郷民とともに産業興隆の礎となつていたのである。

望月忠之丞の才覚を発見し、登用したのは河井継之助だと思ふ。いままで、継之助は栃尾組の庄屋の息子、たとえば大崎彦助・外山脩造・諏訪泰助などと仲良くしていたとある。それらは栃尾郊外の農村の子弟ばかりであったが、肝心の栃尾町の有力者富川・久保田・清水家の姓の者はでてこなかった。

栃尾町の有力者は何らかの形で製糸に関わっていたが、それをとり持つ役人の名前さえわからなかった。

望月家ははやくから数少ない地方支配の一人として栃尾町の産業振興に一役買っていたのである。

河井継之助の藩政改革に於いて、望月忠之丞は何らかの形で見いだされて評価を受けた。戦争が始まると、小隊長に抜擢されて戦闘を指揮している。

このように考えると、河井継之助の藩政改革は多岐に渡つていて、また判明しないことも多い。(稲川)



尊渡神社

### たかのり 栃尾地区栃堀の尊渡神社

栃尾の真渡神社社殿に養蚕を営む様子が表現されている。彫刻は、幕末の名匠・石川雲蝶の手によるもの。御堂南側に機織・繭煮、北側に桑負い・蚕の飼育の姿が彫られている。



繭煮

長岡市指定有形文化財  
真渡神社社殿彫刻  
管理者 栃堀区  
この神社は、栃尾郡の祖神の元祖である、神代卷左門守の霊を奉つたもので、この神社の彫刻は、秋葉神社の彫刻師、石川雲蝶の手によるものである。御堂南側に機織・繭煮、北側に桑負い・蚕の飼育の姿が彫られている。この彫刻は、幕末の名匠・石川雲蝶の手によるものである。御堂南側に機織・繭煮、北側に桑負い・蚕の飼育の姿が彫られている。

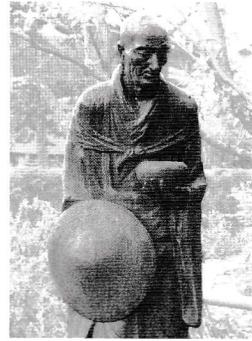
長岡市有形文化財の看板



蚕の飼育(上)と機織(下)

# 「塵壺」を読む

16 連載



良寛像

九月十八日、備中高梁の文武宿「花屋」を発った継之助は、松山城下から瀬戸内海へ南下する道を歩き、一路玉島（現在の倉敷市玉島）をめざした。玉島には備中松山藩の港があり、四国へ渡る航路があった。塵壺では「玉島は家数千軒」「町では幕府領の阿賀崎新町がよく、ついで港を囲む松山領の玉島、さらに亀山領の玉島村と続く」とあるように栄えている様子がかがえる。現地に到着すると玉島の商人・林富太郎を訪ねた。富太郎は方谷の弟子で、のちに松山藩に仕え、方谷の後釜になった人物だ。林邸で夕食を頂いたり、娘の琴を聞いたり、林の弟と顔を合わせたりと、親しげな様子がつづられている。

翌日まるまる時間が出来た継之助は、玉島観光と洒落こみ、円通寺へ行っている。円通寺は、安永八年（一七七九）には越後の僧良寛が訪れ二十年間修行した場所でもある。良寛と継之助の父・代右衛門は親交があり、良寛はしばしば河井家を訪れた。良寛の「聴松庵（河井家）を訪う」という漢詩も残っている。継之助は、良寛が玉島の円通寺で修業したことを知っていて、この日足を運んだのではないだろうか。寺の庭には大石・古松があり美しい景色が見渡せた。日記には「遠く讃洲の山々、近くに瀬戸内の小島が見え、かつて見た富士山のように」とつづられている。「しばらく石上に休んだ」と日記にあるが、良寛の見たであろう風景と自分を重ね合わせてこの風景を眺めていたのかもしれない、と私は想像をたぐましくしてみる。

話はそれるが、幕末の玉島を語る上で欠くことが出来ない人物がいる。備中松山藩士・熊田恰である。慶応四年（一八六八）一月、彼は藩主板倉勝静の警護で大坂にいた。この時起きた鳥羽伏見の戦いで幕府軍は大敗し、徳川慶喜は勝静らを連れて江戸に帰った。一方恰は、勝静から兵百五十余人を率いて玉島に向かうよう命ぜられた。その後備中松山藩は朝敵とされ、松山城は岡山藩兵に囲まれた。玉島に到着した恰も、岡山藩兵に包囲された。恰は、大坂から引率してきた部下助命のため、責任を一身に背負い、松山藩御用達である榎木邸の一室で切腹した。継之助が玉島を訪れた九年後の話である。玉島の町民は、命と引きかえに玉島の町を戦火から救った恰を守り神として敬った。明治三年（一八七〇）氏神である羽黒神社境内に熊田神社を建立し祀った。

さて玉島での船待ち時間も過ぎ、継之助は午後八時によく乗船する。しかし実際の出発は夜中十二時頃、四時間近くも船中で出航を待った。朝の四時前には丸亀到着である。「少し眠ろうと思つたが早くも丸亀に着いて驚く。十里（四〇キロ）の海路も随分早く着くので感心した。」「朝早いので月が空に出ているが、港の様子が分からない。」とつづられるように早朝着で体力的にはハードな行程である。

船から下りて近くの丸亀の船宿に入り、継之助はまず腹ごしらえをしようと考えたのだろうか。「出来合飯もなき様子ゆえ」とあるから、朝飯にはありつかなかったようだ。しかたなく支度して日が昇る前に出発した。港近くの丸亀城を左にして、今日の目的・金刀比羅宮をめざす。金毘羅まであと五・六町（五四五〜六五四メートル）の地点でようやく夜が明けてくる。ここには「町の入り口に川」があり橋が架かっていた。「川」とは琴平町を流れる金倉川をさす。橋は「橋屋根ありて結構なるこしらえなり」と表現されている。これは鞆橋と呼ばれる、刀の鞘のような形をした屋根を持つ橋のことである。十返舎一九の金毘羅道中膝栗毛の中に「上を覆ふ 屋形の鞆におさまれる 御代の刀の ようなそりはし」という狂歌があることから、昔から珍しい構造と名称だったことがわかる。

「山に参詣する。本堂は実に立派で、紺青の画、柱の朱塗り等見事である。」と表現される金刀比羅宮は、「ご存じ」こんびらさん」の名で親しまれる香川県仲多度郡琴平町琴平山にある神社である。幕末には伊勢神宮と並ぶにぎわいをみせ、四国最大の行楽地となった。海上守護・災害除去・福德の神として、現在も全国からの参詣者が絶えない。

『瀬戸内海モダンズム周遊』によれば「その拠り所は、護法善神金比羅（クンビーラ）が、ガンジスの大河を守護する女神ガンガ―を乗せて移動した水神であったこととも関係する。海事関係者の崇敬を広く集め、金刀比羅宮の絵馬殿には航海の安全を祈願する絵馬が多く飾られた。海を守護する武人たちの信心も篤い。古く塩飽水軍は金毘羅大権現を深く信仰し、全国の寄港地で金比羅信仰を広めた。」とある。

備中松山を經ち、玉島を通過して四国へ向かった継之助。実は行きも帰りも船中泊の行程だ。弾丸金毘羅ツアーに行つてこれらる継之助は、体力があるといえない。

（高柳）

※参考文献  
 「角川日本地名辞典」角川書店／「明治維新人名辞典」吉川弘文館／「高梁 歴史人物事典」増補版「玉島田木家ゆかりの人々」倉敷ぶんか倶楽部編 岡山文庫287／「瀬戸内海モダンズム周遊」橋爪紳也 著 芸術新聞社

## 交流研修旅行

真夏を思わせる暑さの七月十一日、第九回交流研修旅行が開催されました。今回は「加茂軍議と戊辰戦争巡礼の旅」と題し長岡城奪還作戦軍議の地である、北越の小京都加茂を訪れました。

継之助率いる長岡藩と奥羽越列藩同盟諸藩が開いた作戦会議が、どこでどの様に行われていたのか。そして何故、加茂に集結したのか。これまで知りえなかった

出来事や背景を、どこか懐かしく風情のある街並みを歩きながら、稲川館長の解説を聞いていただきました。

大変暑い中での散策となりましたが、参加者の皆様のご協力により有意義な一日となりました。ありがとうございました。また、事前の準備から当日の手厚い歓迎まで、加茂商工会議所の皆様お世話になりました。(柴田)

## 交流旅行に参加して — 会員の声

●北越の小京都・加茂一行が似合う町  
 炎天下の加茂の町を、長岡藩(記念館)の五間梯子の幟の行列が歩く。これは、戊辰以来百十数年ぶりかと思つた。当時この町には会津などの同盟軍約三千人が集結し、諸藩の旗や人馬で溢れかえっていたという。加茂会議で、継之助達はどんな発言をし、どんな計画を練っていたのだろうか。今、美しい静かな町は黙して語らない。

北越の小京都加茂。今でも祭礼の日には、雅やかな行列がこの町を練り歩くといい。お昼の京風のお弁当も大変美味しく頂いた。京都の維新の志士達

の物語のように、この静かな町に眠る北越戊辰戦争に散った人々の魂を呼び戻してみたい。そんな気持ちにさせる一日だった。最後に、加茂商工会議所や友の会事務局の皆様、どうも有難うございました。  
 — 遠山典子 (長岡市)

### ●加茂研修旅行に参加して

初参加のドキドキ、稲川館長に会える嬉しさ。数日前から楽しみにしていた加茂行き。つとは言っても娘が加茂の高校に通っているため、年に数回は行っているのですが加茂がこんなに重要な場所であった事に驚きました。勉強熱心な参加者の皆様の後を付いていくのが一杯でしたが充実した一日になりました。本当にありがとうございました。  
 — 小山智恵美 (三条市)

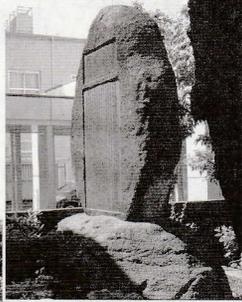
### ●加茂軍議と戊辰戦争 巡礼の旅に参加して

今回「継之助記念館」主催のバス旅行に参加したのは、先日テレビ放映や林修氏の講演を拝聴して「加茂軍議」に強い関心を持ったからである。恥ずかしながら戊辰戦争での会談の双壁が、慈眼寺での「小千谷会談」と今回訪れた「加茂軍議」であったことも知らなかった。最初に加茂商工会議所を訪れ、会頭のお話して加茂市の活性化のための市内の史跡等の発掘や市民への啓蒙の熱意に心を打たれた。

この戊辰戦争で貴重な「軍議」がどうして奥内のほぼ中央に位置している「加茂」で行われたのか。それは、加茂が地理的条件や経済的理由で最適の場所であったからだとはいっていい。当



大昌寺殉難墳墓にて



市川邸跡



青海神社の赤鳥居にて



布施修作 (長岡市)

時「加茂」は、新潟より金貨銀貨の交換所として多額の取り引きが行われていたことや奥内の多くの米の集散地として栄えていたことなどが理由だったことも知った。  
 青海神社への長い石段を登るのは、少し厳しかったが、京都の賀茂神社との関わりなども学習した。また、大昌寺近くの墓地に今も戊辰戦争での会津藩士のいくつかの墓が残っていた。これも加茂の人たちがよく守ってくれた証であろう。次に戊辰戦争に大きく関わり、継之助らが宿陣地とした皆川邸跡や「加茂軍議」の行われた市川家顕彰碑を見学した。  
 今回の旅行では、長岡から加茂間の往復の車中の稲川館長の資料等に基づいての詳しい説明で、これまでわからなかった史実をよく知ることが出来た。また、多くの関連資料をいただき、帰つても復習できることが大きな喜びである。当日の気候は、大変な猛暑だったが、記念館等の職員の皆さんが、終始参加者の体調等に気配りして下さったことに感謝したいと思う。ありがとうございました。

### ●当日の行程

記念館出発 → 加茂商工会議所 → 大昌寺 (戊辰戦争で桑名藩が本陣とした寺、裏の墓地には殉難墳墓) … [昼食] … 加茂市民俗資料館 (加茂山公園内) → 青海神社 (726年創建、加茂の地名の由来となった神社) → 市川邸跡 (加茂軍議の舞台となった場所) → 皆川邸跡 (加茂軍議の際、継之助が宿陣地とした場所) 加茂土産物センター → 記念館到着

## 只見塩沢墓前祭

長岡藩総督として戦った河井継之助の終焉の地・福島県只見町塩沢地区。今年も命日である八月十六日の墓前祭に、長岡の友の会より十一名で参列して来ました。

当日は夏空がまぶしく感じられる日。途中立ち寄った只見駅では、案内所の方が「今日はありがとうございます。昨日は、村医・矢沢宗益様のお孫様が来られていましたよ。」と話してくださいました。

午後一時より地元を中心に多くの方が参列され、医王寺で墓前祭がしめやかに執り行われました。墓前にて、小千谷の慈眼寺の住職様による読経が行われました。塩沢町観光協会田村会長より「幕末の雄、継之助終焉の地として情報を発信し、将来にわたって出来る限り伝えてい



墓前で慰霊の折りをささげる下田会長

きたい。」と追悼の挨拶をされました。続いて参列者が焼香をしない、その後前田剣豪会の勇壮な剣舞が披露され、無事終了となりました。

その後は、只見の記念館に会場を移し、渡部喜子先生お手前による、お薄のお茶を堪能しました。帰り際には只見記念館のスタッフの方より、「来館された方々には、長岡にも継之助の記念館がありますので行ってみてください、とお伝えしています。」と伺い、心配りに感謝しました。私たちは改めて、長年に渡る只見と長岡の深い絆と慈愛に感謝し、只見を後にしました。

帰路は突然の強い雨となりました。雨で滲むバス窓は、まるで継之助が私たちと別れを惜しむかのようにも感じられました。(島岡)



前田剣豪会の勇壮な剣舞

## 記念館日誌 某月某日

現在オンラインゲームの影響で刀剣ブームが到来しています。ゲーム内でモデルとされた本物の刀剣を見に行こうと、全国各地の美術館・博物館の展示や、日本刀にまつわる場所に足を運ぶ若い女性が増えているそうです。

実は記念館にも寄贈された刀があります。残念ながら河井継之助の刀ではありませんが、朱塗りの鞘につつまれた備前国住長船勝光です。室町時代の作といわれています。



備前国住長船勝光

種別:脇差  
長さ:56.0センチメートル  
銘文:(表)備前国住長船勝光作(裏)永正六年八月日

## 会員の声

### 目

### 「会員の声」大募集!

#### ●日野・新撰組まつりに参加して

五月十日(日)五月晴れの日野市甲州街道を会場とした新撰組まつりに参加してきました。先日の講演会の講師 峯岸氏との友好関係から、米百俵まつりのPRを行ってまいりました。持参した河井継之助の等身大のパネルは、若い女性ファンの記念写真の場となりました。河井人気は、林修先生のお陰もあり、かなり人気上昇でした。「大河ドラマ」への道がみえてきた二日でした。河井ファンの皆様、ありがとうございました。—廣井 晃(長岡市)

#### ●林先生

少しさかのぼり三月のことですが、無料ということと、記念館にまだ行ったことがないということで、早々に申し込み、講演に行くことに。(会場は満員でした)林先生のことにはよく知らなかったのですが、継之助が好きで、歴史が好きで、話が綾小路きみまろさんのように面白い。人は顔つきで分かるなんて話は、なるほどと思わせられましたし、すっかりファンになりました。—渡辺貴広(仙台市)

小雨の降る六月のさなか、専門家の牛腸さんが、この刀の刀とぎのため来館されました。キラリと光る刃物を目の前にしながら、もくもくと作業をされる牛腸さん。

せっかくなので手入れをされた刀についてお聞きしてみました。刀には、いわゆるオーダーメイドである「注文打」と、量産型である「数打」があるようですが、これは「注文打」とのこと。館を出られる時に「前任者から『よい刀が記念館にあるよ』と言われていましたけど本当でしたね」とおっしゃっていました。(高柳)

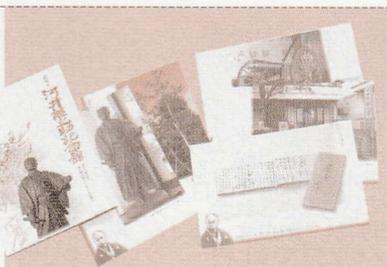
#### ●今泉鐸次郎著

『河井継之助傳』を読む会  
第2・4月曜日 午後1時~3時

●楽しい詩吟教室:第1・3月曜日  
午前10時~11時30分

●記念館オリジナルポストカード販売中!  
(5枚組、パッケージ付300円)郵送も承ります。

●各種講座実施中! お気軽にお問合せください!



●総会・講演会報告

四月二十五日、二十七年度友の会総会・講演会・懇親会が会館青善にて開催された。講演は、講師に友の会会員でもある峯岸弘行氏をお迎えした。演題は「新選組と会えるまち 日野市の観光とまつりについて」。会場には百五十人もの聴講者が訪れた。

最初に「新選組のふるさと日野」の映像を鑑賞し、つづけて資料について説明された。新選組のふるさと歴史館での新特別企画展ちらし「二十一世紀の新選組」、観光マップ「新選組だ!」新選組にまつわるお土産一覧「おみやげグランプリ」など色とりどりの資料である。

次に、峯岸さんの新選組との出会いと思いを語られた。高校三年のとき司馬さんと出会い、新選組について知り土方歳三のファンになったという。今から三十年以上前、日野市には、新選組に関するお土産は一升瓶のお酒しかなかった。その後新選組ファンが喜ぶようにと、和菓子の中で新選組グッズのお店を作ったりしたそうだ。

三つ目に、大河ドラマ「新選



講演される峯岸弘行さん

た。この中で新選組は十年に一回の間隔でブームが来る、以前のファンは年齢層が高かったが、最近では新選組が題材のアニメ・ゲームの影響で小中学生が多く訪れるとおっしゃっていた。

大河ドラマが終了してから日野市の観光協会は「日野新選組祭り」の事務局をおき、祭り三日間に様々なコンテストも開催しているという。会津まつりを参考に、吹奏楽のパレード、農兵隊の武者行列春日隊などを導入したそうだ。祭りにあわせ、日野から会津若松行き「新選組お座敷列車」も走り、ファンを支援する環

境を整えてきているという。

最後に署名活動と大河ドラマ化までのお話や「新選組をやるならば函館までやって欲しい」という思いも語られた。名残惜しい雰囲気の中「なんでも鑑定団」に出演したときの映像を見て終了となった。河井継之助の師匠・山田方谷の出身地、備中松山藩出身の新選組の隊士が多い、という話からはじまり、近藤勇の命日である四月二十五日に講演できた事に縁を感じるとおっしゃった峯岸さん。新選組と日野市に対する熱意が強く感じられるお話しでした。(高柳)

編集後記

●日毎に秋も深まり紅葉の季節となりました。時にはゆつたり読書の秋を楽しみたいという思いと、日頃の勉強不足解消のため、司馬遼太郎の「峠」を読み返しています。日本を離れ、不安な外国生活のさなか出会ったこの一冊。故郷・長岡の雪景色が目につかび、いかなる環境でも自分の信念をもって生きる大切さを感じました。継之助から勇気をもらい、心の支えとなった大切な一冊です。ある日「峠」を携えたお客様が来館されました。それは何度も読み返されて変色し、多くの付箋で膨らんだ一冊でした。お客様の継之助のイメージが、見学されることで更に躍動する姿を想像し、大変嬉しくなりました。各々の中で継之助が今なお生き続けていることに歴史のロマンを感じます。継之助への思いに共感し、皆様の探究心にお応えできるようこれからも努めてまいります。(金澤)

河井継之助記念館 友の会について

会員の交流や情報交換を通して継之助について親しみ、学び、記念館を応援する会です。

- 会員数/正会員:504名/協賛会員:47名(8/31現在)
●特典/①友の会会報「峠」配付
②会員との交流 ③催事案内・参加 ④研修旅行への案内・参加

会員募集中

- 入会手続き(入会金千円が必要となります)
①申込書に入会金と会費を添えて、事務局へ持参。
②申込書を事務局へ送り(郵送、FAX)、入会金と会費は銀行振込または郵便振込で納入。(手数料は本人負担となります)
●会費 ※会計年度は3月31日まで
・入会金/千円(新規入会時のみ)
・年会費/①正会員/(ア)小中学生:500円 (イ)高校生以上:200円
②協賛会員/一口5000円(法人の他、個人でも可)

Table with 2 columns: 加入者名/河井継之助記念館友の会, 口座番号/郵便局 00560-9-96432, 長岡信用金庫本店営業部 普1032829, 北越銀行本店 普1764663, 大光銀行本店 普3011256, 第四銀行長岡営業部 普1560562

●友の会事務局/河井継之助記念館
友の会ホームページアドレス http://tsuginosuke.net/

新入会員ご紹介

(平成27年3月21日~8月31日現在)

Table listing new members with columns for name, address, and affiliation. Includes names like 村澤 秀樹, 米山 岳彦, 早川 正幸, etc.

- 編集人: 稲川明雄, 高柳吟音, 布川博子
広報委員: 猪本剛六, 渡辺静江, 駒形豊
島岡真由美, 金澤奈生子
関口トシ子, 高木春夫, 森山建之
田邊定雄, 羽賀龍介, 廣井晃
堀口晴夫, 山村雅隆, 脇屋雄介
渡辺千雅

構成: 月刊「峠」編集部
印刷: 高柳印刷株式会社